

## 新しい日々における背景

安 楽 泰 宏 (植物)

本年3月、東大薬学部より本学植物学教室へ赴任  
することになった。思わざる御縁を感じ、襟を正す  
思いである。  
顧みる時、これまでの十数年間、私における自然

科学的生命体の対象は微生物であった。生きた細胞を経廻るさまざまな物質群のホメオスタシスに興味を持ち、そのからくりにかかわる turnover と transport の諸問題を生化学的手法で解析する実験家としての日々を過してきたことになる。この間、核酸代謝に関する新しい酵素を世に送り出したこと、生きた細胞に菌冷ショックを与えるとその生きざまが変化すること、有機物質が細胞膜を通して旅ゆくデッサンを画いたこと、環境変化に应答する生体エネルギー源の質・量の転換の見事さに感銘したことなど、生命の基本的理解にかかわる小さな出会いに遭遇してきた。いずれも、細菌細胞を対象とした分子レベルの風景といえる。小さな細胞の辺縁を辿ってそこに在る数々の物質代謝の営みと、それらの流れを整合的に統制支配している生体制御の諸機構を俯瞰してきたと考えている。

本教室に着任して1ヶ月、新研究室の建設に従事するかたわら、教室の歴史の一端に触れることがあった。明治・大正・昭和と移る植物学100年の歩みの長く巨きな足跡を仄聞することができた。時代の節々に開拓があり、伝統が興り、発展があった。想い新たなものがある。始まった日々の実践のなかに教室の一員としての責務を果たしたいと思い、述べ

るべき抱負の表われることを願っている。今後努めるべき研究・教育目標の未知なる部分には、本学教室の伝統に学び、時代に学び、自然に学ぶ新しい姿勢を当てたいと思う。分子レベルにおける生命像の解析を続けつつ、生命の科学の思索と実践に、植物を学び、植物学に親しむ機会の加わり得たことを大いに喜びとしている。

私の人生において、植物は自然のなかにある風景であり、情感を通して眺める客体であった。芽立ちの美しさを感じ、四季折々に訪れる花ばなの恵みを享受するものであった。黄葉紅葉の移ろいに色素の代謝を考えるよりはその色調の微妙な翳りを愛し、屹立する冬枯れの梢は何にもまして来るべきもの予兆を映すものであった。

微生物を経廻って今日の歩みがあった。そこには尽きることのない自然があり、生命があり、その営みが続いている。今日より、自然のなかに植物の点景を見、歩を止めて観ることもあろう。想うに、生物学の志向するところは自然にあり、生命にあり、生命の尊厳に対する人間の叡智の深化をはかることであろう。往き行く道には、動物もまた人間も通わねばならない。